

学校給食



◆特集

うつわから広がる食育



図工・美術で
表現する食文化

統計からみる2014年の食中毒発生状況

新潟県 きょうの給食なーに？

うつわから
広がる食育

日本人は昔から「道具」を大切にし、そこに精神をも反映して、生活してきました。そして食文化の発展にも当然、茶碗や箸など多くの道具が関わっています。食育を考えると、これまで食事の作法という側面から、食具の扱い方を指導することはあっても、食具そのものの持つ意味を考え、そこに込められている思いを学ぶ機会は少なかったように思います。

今回、海老原誠治氏が外部講師として各校に出向き、先生方とプログラムを構築して実践してきた事例には、うつわから広がるさまざまな食育のかたちが報告されています。特集2(58~61p)と併せて参照ください。

うつわを通じた
文化・環境・食育活動

資源と環境の教育を考える会「エコが見える学校」
関東学院大学非常勤講師
三信化工株式会社
海老原誠治

三信化工株式会社・営業本部所属、関東学院大学非常勤講師(人間環境学部)。佐賀大学物理学科卒業、佐賀大学・窯芸教室 宮尾正隆教授に師事、佐賀県立有田窯業大学校・常勤講師を経る。

うつわを通じた文化・環境・食育活動

資源と環境の教育を考える会「エコが見える学校」、三信化工株式会社

海老原誠治

※本文中の学年・肩書等は平成26年度のものです。

プログラム①

「大切に
思いのかたち」

(1) プログラムの概要

このプログラムの目的は、昔の日本人がさまざまな存在(自然・人・生き物・物など)を敬い、どのように大切にしてきたのか、その大切に思いを「かたち」として紹介し、子どもたちの「気づき」へとつなげることです。

基本的な内容(32p~)を中心として、学校からの目的に合わせてその都度再構成し、必要に応じて新たな要素を追加します。なるべく五感で触れてもらえるよう、「生きた教材」として実際の食器も用います。また外部講師(三信化工から派遣=筆者)が講義する場合、一方的な話に陥りやすいこともあるので、実感へのつながりを期待してワークショップも行い、時間の許す範囲で調整します。

(2) 実践校との連携

プログラムの実施(表1)に当たっては、主に学校栄養職員・栄養教諭の先生や担任の先生(T1~T3)の構成で導入をし、

資源と環境の教育を考える会「エコが見える学校」(<http://www.kababon.org>) (以下、エコ学)では、衣食住を通じた環境の出前授業やワークショップ・セミナーを実施しています。エコ学は、2012年に、消費者と二人三脚で環境問題を考えることを目的として発足しました。モノづくり企業を中心とし、顧問に西尾チヅル氏(筑波大学)を迎えた産学コンソーシアムであり、給食業界からは三信化工(株)と朝日化工(株)が参画しています。また国内2番目となる環境教育等支援団体の指定の下(文部科学省および環境省、環境教育等促進法)、2014年度には70回以上・約1万人の方を対象とした実践を積みました。

そして三信化工では、このエコ学の活動を通じ、和食と文化・環境を切り口として、さまざまな存在を“大切に思うこと”と、“自然を尊ぶ思い”などへの子どもたちの「気づき」を期待したプログラムを展開しています。

小・中学校を中心として連携し、プログラムを開発・実践・調査・検証し、出前授業・セミナー等を含め2014年から50回程度・約5千人の児童生徒・教職員を対象として実践しました。本稿では、代表的なプログラムの事例を紹介します。

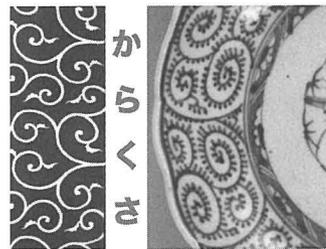
外部講師につながります。練馬区立光が丘四季の香小学校では、校長の富澤素子先生が起案し、担任の先生を交えて打ち合わせをして、プログラムの項目やワークショップなどをどこまで行うか、構成をアレンジしました。板橋区立大谷口小学校の場合でも、栄養教諭の戸城由己子先生がコーディネーターとなり、学年主任・担任の先生を交えた打ち合わせができたため、内容の検討や、当初予定していた時間枠を拡張（1コマ→2コマ）して実施できました。

興味深い事例では、新宿区立落合第二中学校での授業が挙げられます。この時間枠は本来「道徳」であったこともあり、食育の視点を取り入れることで、食具や食習慣を「大切にする」といった道徳的心情を養う「家庭科」の授業として、家庭科教諭の宇野頼子先生が担当となり、実践しました。

(3) 基本的なプログラム内容

授業の主な項目と、子どもたちへ講義した内容を、話し言葉で以下に挙げます。

◎唐草文様



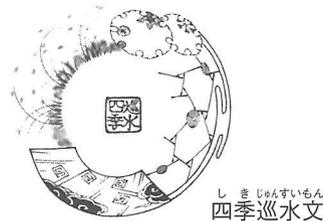
からくさ

▶世界から伝わった柄として、風呂敷の唐草文様を見せる筆者



唐草文様は、風呂敷や獅子舞等で、日本では身近な柄です。実はこの柄は、古代地中海沿岸で生まれ、大昔に日本へ伝わってきました。文化を学ぶ上で大切なのは、「日本だけが素晴らしくて良い文化」と思うのではなく、世界中の文化が互いに影響を与え合って歩んできたのであり、文化や価値感はお互いに尊重すべきこと、ということです。それを忘れないでほしいです。

◎「このがらなんだ」(グループワーク)

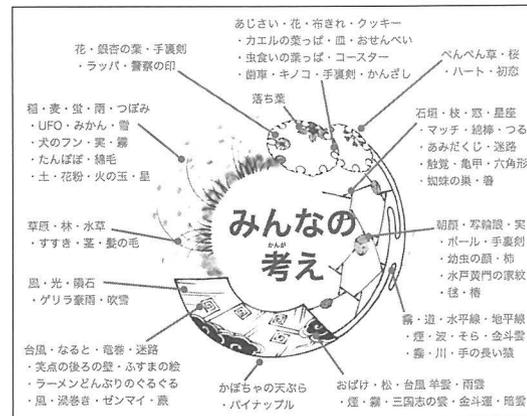


①意見を出し合う

お茶碗に描かれている文様は何だろう？昔の人がよく使っていた文様です。まず昔の人の気持ちを考えながら、何を描こうとしていたのか考えよう。それとは別に、み

表1 プログラム①「大切に思いのかたち」の実践事例（東京都）

教科	時間	対象	起案	連携教諭	実践校
総合	90分 (2コマ)	小学6年生	校長	学年主任・担任・ 学校栄養職員	練馬区立 光が丘四季の香小学校
総合	90分 (2コマ)	〃	栄養教諭	学年主任・担任	板橋区立大谷口小学校
家庭科 (道徳)	50分 (1コマ)	中学1年生	家庭科 主幹教諭	学年主任・担任・ 学校栄養職員	新宿区立落合第二中学校



▶グループワークのワークショップでいく(梅島小学校)児童から挙げたさまざまな意



んなはどんなふうに見えて感じるのかも考えよう。へんてこりんでも良いから、いろんな意見をいくつでも、たくさん出そう。そしてみんなから出てくる意見を、お互いに聞いてみよう。

②意見の発表

みんなの意見に当たりも外れもないよ。自分で思ったり考えたりしたことは、“人と違っていても大切なこと”です。

みんなが考えたことと違って良いので、昔の人がどんなふうな思いでこの文様を描いたのか想像してみてください。

【四季巡水文の表現】 ※文様の説明は時計回り

- ・雪輪雪華文；華として見立てられた雪の結晶，降り落ちる粒，輪郭を表す輪
- ・春霞に梅花氷裂文；薄くたなびく春霞，梅のつぼみがほころぶころ，温められ，薄く割れる氷のヒビ
- ・扇窓絵に雷文；扇の形に抜かれた景色，雨雲から雨と雷が降り注ぐ
- ・秋草露文；冷えた空から搾られる雫玉，秋の草に留まっている

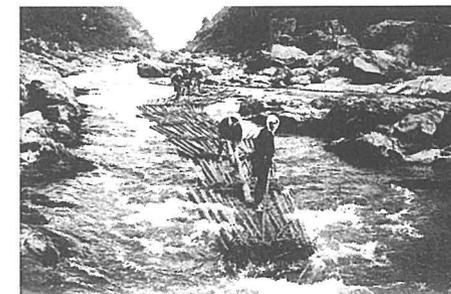
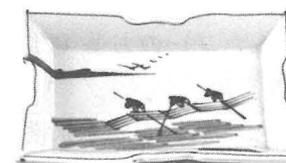
この柄は、昔の人が「四季」を通じ、うつろい、姿を変えるさまざまな「水」を描いた文様を集めたものです。生活でも重要な水、昔の人は自然や水を敬う気持ちから、文様として生活に取り入れたんだね。

◎松竹梅



松竹梅は、どうしておめでたい文様なのかな？ それは厳しい冬でも変わらず松竹が青々と生きているってすごいなって、昔の人は励まされていたからです。そして、長い冬を終え、春一番に花開く梅を見てほっとしたんだね。冬の間を耐えて頑張り、春を喜ぶ文様です。

◎いかだ流し



いかだ流しって何をしているところかわかるかな？ きこりが切り出した材木を運んでいるところです。昔はトラックなどがなかったから、川を使って運んでいたんだね。材木をためた所は、「木場」と呼ばれ、日本各地の海や川にありました。昔の人は

自然と一体となり、自然や水を活用して生活していたんだね。

◎くじら供養



これは昔の人が作ったお墓だけれど、誰のお墓かわかるかな？ 実際、くじらのお墓なんです。江戸時代の人、多くのくじらを捕まえて殺して食べていました。その時いつも、「殺してしまっでごめんね、食べさせてもらってありがとう」という思いでお墓を作り、供養していました。

◎虫供養



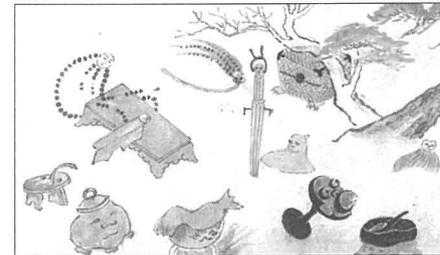
これはバッタ（イナゴ）のお墓です。江戸時代の人、稲を食べるバッタの仲間を火で焼き殺していました。お米を収穫するためには仕方がないけれども、「ごめん

ね」という思いで供養していました。

◎針供養

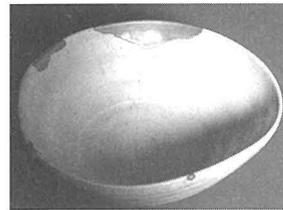
昔から日本人は、「物」に対してもお墓を作っていました。長く使った針にも、ありがとうという思いで供養しています。

◎付喪神（付喪神記）



「付喪神記」(国会図書館蔵)

付喪神記とは、捨てられた道具たちが、人間への復讐を考える話です。昔から日本では、物に魂が宿ると考えてきました。だから道具も、粗末にされると怒ったり悲しんだりします。



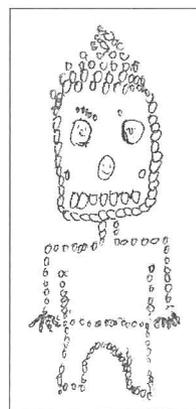
また昔の人は、壊れたり死んでしまったりとすると元に戻らないこと、「掛け替えのない」ことを知っていたから、物を大切に

◎「みんなの付喪神」(ワークショップ)

みんなの給食や身近な物が、付喪神や妖怪や神様になっちゃった！ 付喪神はなんて言ってるかな？ [以下、児童の描いた付喪神]

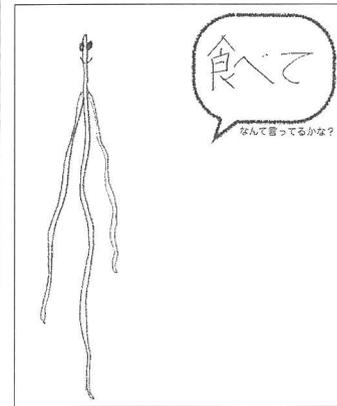


鉛筆の芯が大事に扱われていないと怒っている



お米が「最後まで食べて～」と訴えている

「食べて」と笑う、麺を描いている



◎味を大切にうつわ



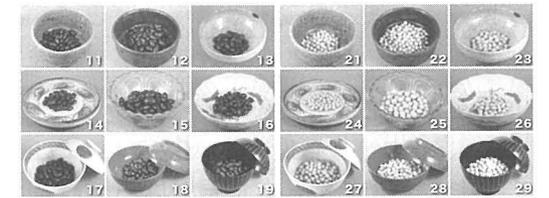
よく見る和食の形です。一膳・一汁三菜と言います。もし給食が全部一つのうつわで出てきたらどうかな。おいしく感じる？

日本の食文化は、一つひとつの味を大切にするために、基本的に一つのうつわには、一つの味(料理)を盛り付けます。

◎しつらい・ご馳走、おもてなしと待ちわびる気持ち(ワークショップ)

①食器の組み合わせを選ぶ

大切な人が寒い日に遊びに来た時、どんな食べ物と食器の組み合わせだと暖かく感じるか、次の写真の中から考えてください。また暑い日には、どんな組み合わせだと涼しく感じるのか、考えてください。



②おいしく食べてもらう工夫を考える

大切な人にどのような食べ物や器を使って食べてもらうか、みんなに考えてもらったことを「しつらい」と言います。食べ物をおいしく楽しく食べてもらうための工夫です。頑張っ走り回って準備した食べ物は「ご馳走」です。人は大切な人が来る時に、「待ちわびる」と言って、早く来ないかソワソワします。そして喜んでもらうために、「ご馳走」と「しつらい」で、「おもてなし」をします。

(4)感想と考察

お茶碗に描かれた文様が何かを考えるワークショップでは、どんな変な意見が出

表2 プログラム①を構成する内容・教材とねらい

内容	ねらい
文様；唐草	日本の文化への理解だけでなく、他国の文化とのつながりの歴史を理解・尊重する。
グループワーク「このがらなんだ」	昔の人の立場で考える。さまざまな他人の意見を聞く。季節のうつろいへ意識を向ける。
文様；さまざまな水(四季巡水文)	生活や豊作に、自然と水が古くから密接に関係してきたことを理解する。文様により生活が彩られていたことを理解する。
文様；松竹梅	季節の変化の中で一喜一憂して生活してきたことを理解する。
絵柄；いかだ流し	自然に受け入れられながらも、自然を活用して生活していたことを理解する。自然に対して敬ってきた気持ちを理解する。
くじら・虫・針供養 付喪神・繕い	古くから、食べ物・生物・物など、さまざまな存在を尊ぶ気持ちと行為があったことを理解する。
ワークショップ「みんなの付喪神」	身近な物の視点に立ち、粗末にされたり大切にされたりすることを考える。
味を大切にうつわ	食材一つひとつを大切にしてきた日本の食文化を理解する。
ワークショップ「しつらい・ご馳走、おもてなしと待ちわびる気持ち」	日本の食文化に込められた、さまざまな形で相手を思う気持ちへの気づきを促す。

でも、そのまま記載するように促します。さまざまな意見が出ることで、互いの尊重や理解につながればいいと考えます。

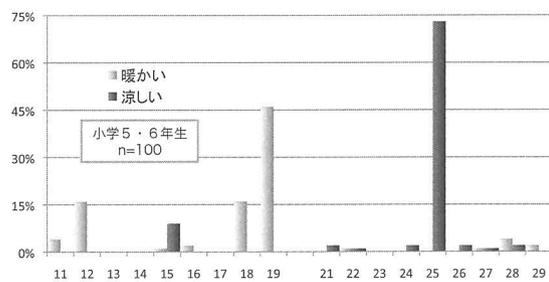
[ワークショップ後の感想 (中学2年生)]

○同じ柄なのにみんな意見がばらばらで、「蛭」という人もいたし「しずく」と答える人もいて、人それぞれ見方が違うところに驚きました。

○昔の人の表現の仕方や描き方を初めて考えました。

また「しつらい」のワークショップをする際、最初は少し高度ではないかとの危惧もありました。しかし、皆それぞれに考えて答えを出している結果が得られました。

図1 食材と器を組み合わせた印象 (35p右上の器)



暖かい印象は12・18・19番、涼しい印象はガラスの器 (15・25番) で、食材との相性が大きく反映した。

光が丘四季の香小学校校長・富澤素子先生より

外部人材を招くことで、児童には本物の機材や技術・知識に触れ、プロの目・意識を感じてほしいと思いました。うつわを通じた食育では、柄を教材にした話などが子どもたちに新鮮で、新たな視点が開けたのではないかと思います。食育にとって、まずは食べ物を大切にしないことが重要です。これを基本として、さまざまな存在に対し大切にすることへの展開は、日常生活に活かされるため、教育現場で取り上げる意味があると思います。

プログラム②

「うつわから考えるモノの大切さ」

(1) プログラム概要

このプログラムの目的は、身近な給食食器を大切にすることから、身の回りのさまざまな物を扱う際の気づきにつなげることです。特に食器の破損への気づきも意図しています。全校集会を想定して構成され、小・中学校全学年など、理解度に関がある対象に同時に伝えるため、言葉遣いや広い年齢層でも興味を引くような画像の選択が重要となりました。

(2) 実践校との連携

このプログラムは、杉並区立三谷小学校校長の山岸一良先生・栄養教諭の江口敏幸先生との模索から生まれました。T1～T2が基本ですが、給食委員の児童と連携し、給食食器の破損数に関わるクイズや、破損しやすい状況の再現寸劇を組み合わせた事例もあります。

事例(表3)は都内に集中しますが、単純に筆者の活動範囲に近いというだけでなく、強化磁器の使用割合が全国に比較してかなり高いこと、食器の破損率が都全体の共通課題であることも反映しています。



▲給食委員会によるクイズ (東小松川小学校)

表3 プログラム②「うつわから考えるモノの大切さ」の実践事例 (東京都)

対象	内容	起案	実践校
全学年	全校集会を想定したプログラム開発	校長・栄養教諭	杉並区立三谷小学校
〃	給食委員会によるクイズ	栄養教諭	江戸川区立東小松川小学校
〃	〃	栄養教諭	文京区立本郷小学校
〃	給食委員会による破損再現劇	学校栄養職員	江戸川区立一之江小学校
〃	〃	教務主任	文京区立青柳小学校
〃	中学校での全校集会	栄養教諭	北区立稲付中学校

表4 プログラム②を構成する内容とねらい

内容	ねらい
さまざまな存在への供養・お墓	古くから、食べ物・生物・物など、さまざまな存在を尊ぶ気持ちへの気づきを促す。
お茶碗が出来るまで	さまざまなつながりで製品が出来ることを知る。
主な破損と原因	不可逆性への気づきと破損原因への留意を促す。
繕い	昔の人が大切にしている行為だった繕いとその意味を知る。
かけがえのないこと	自分なりに大切にすることってどんなことを考える。

(3) 基本的なプログラム内容

主な項目と、子どもたちへ講義した内容を、以下に挙げます。

◎さまざまな存在への供養・お墓

昔の人は、さまざまな物にお墓を作っていたんだよ。何でだろうと考えながら、お話を聞いてね。

◎お茶碗が出来るまで

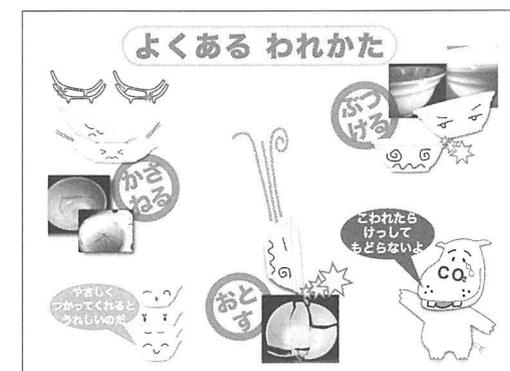


動画等も使用して説明

多くの人・資源・エネルギー、さまざまなつながりで、焼き物が出来上がるよ。だから大切に使ってほしいんだ。

◎主な破損と原因

でも壊れてしまったら、決して元に戻らないよ。どんなときに壊れるかを聞いてね。

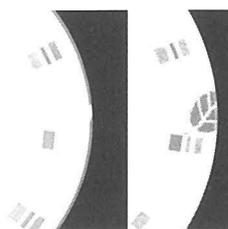


◎繕い

少ししか壊れていない物を捨ててしまうのはもったいないよね。昔の人にならって「繕い」をしてみたよ。

- ・壊れた物でも、直せるときもあるね。
- ・どうして壊れちゃったのかな？
- ・乱暴にしちゃってごめんね。

いを、少葉の模様に補修(繕い)して導入





◀ 体育館でワークショップをしている様子（一之江小学校）

◎文様をデザインし、彫る

篠崎中学校のプログラムでは、文様を制作する対象が銘々皿でした。線彫りした木の皿に、光沢が出るまで塗りと磨きを繰り返して、漆の溜塗り調（塗りが透けることで、地肌の凹凸が塗りの濃淡として鑑賞できる）の風合いに仕上げられました。

(4) 感想と考察

初期の授業の子どもの感想の中で「難しかったけれど楽しかった」「できないと思ったけど、できたからすごかった」という旨の感想が多く目に留まりました。

課題としては、下記が挙げられます。

- ・「一つの文様」→「レイアウトする」という作業手順をワークシートの枠で明確化するとよかった。
- ・児童の作業時間が短い一方、描かせるワークシートの枚数が3枚と多い。



▶ 美術科教諭の藤原みなみ先生と栄養教諭の阿部容子先生（篠崎中学校）
▲ 生徒が制作した木彫りの皿と樹脂粘土で作った練り切り作品が並び

和菓子と銘々皿の2点をセットで展示しましたが、それぞれが鑑賞者をもてなす気持ちで制作を行い、色とりどりで個性豊かな皿が並びました。

（美術科教諭・藤原みなみ先生）

美術科のデザインの授業を見学して以来、美術科との食育を模索していました。美術科と和の器を結び付け、その後、和の食器で食事をする、授業の点と給食時間の点を線で結ぶ体験につなげたいと考えて実施しました。生徒は体育館での授業・グループ学習に引き続いての給食時間で、授業時使用と同種の食器で楽しみながら食事ができ、忘れられない貴重な体験ができたと思います。

（栄養教諭・阿部容子先生）

和食給食

前出のプログラムの大半では、授業と連携して和食器による給食も展開しました。実施方法においても、和室に正座しての喫食、バイキング方式等さまざまあります。

また、豊島区立千早小学校の場合は、外部講師ではなく、こちらから提供した資料を基に、栄養教諭・嶋崎美香子先生が、6年生2クラスの給食委員との連携で、食文化の指導を行った後、和食給食を実施し、北区立明桜中学校では学校栄養職員・枝木美咲先生が単独で和食給食を実施しました。



▲ 教室にマットを敷き、その上で正座して和食給食をいただく（三谷小学校）

▼ パワーポイント等資料を使って、日本の食文化を説明する給食委員の子どもたち（千早小学校）



◀ 黒盆を使っている和食給食は、いつもとは違う雰囲気をつくり出す（田無小学校）

◎文様と漢字、仕上げ

文様を画用紙に清書し、色画用紙で裏打ちします。題字となるオリジナル漢字を配して完成です。

▶ 児童の作品の前で、6年担任の森岡俊郎先生と栄養教諭の宮崎和子先生（梅島小学校）



良かった点として、伝統的な文様についての理解ができ、食器だけでなく物を大切にしている日本人の心に気づいたことがあります。身近なものに思いを寄せて、文様としてデザイン化して日常生活で使うということを知り、体験したのは大きな知的財産となりました。（担任教諭・竹元恵美先生）

「大切にすること」だけでは道徳授業にしかありませんが、先人の工夫や工芸的価値を知らせることで、図工を含めた総合的な学習の時間の対応への広がりが期待できました。また自ら考えた文様を表現する児童が多く、タイトルとする漢字の組み合わせも子どもらしい発想で、なるほどどうならせる、感心する作品となりました。

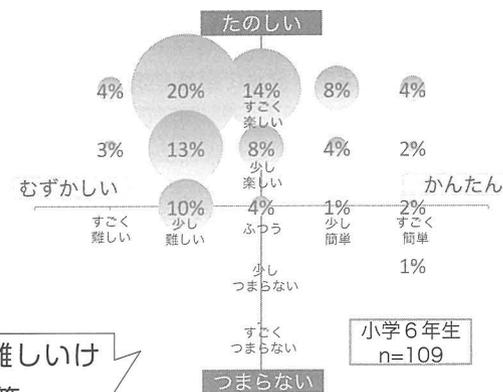
（学校栄養職員・高橋富士子先生）

児童の40%が「難しいけれど楽しい」と回答



◀ 6年担任の竹元恵美先生と学校栄養職員の高橋富士子先生（一之江小学校）

図3 文様の表現に関する感想



千早小学校栄養教諭・嶋崎美香子先生より

和食器から四季のうつろいや文様に込められた思いや意味に、あらためて触れて、やはり日本の伝統はいいなあと感じました。特に、いかに流し・木場の話は、男子がとても食いついていました。女子は、松竹梅の意味を、興味深く聞いていました。あらためて文化や歴史に触れることができました。

何よりも、和食器に盛り付けることによって、とても料理が栄えました。まず、和食器が登場すると、歓声が上がりました。児童は和食器で食べると、いつも以上においしいと、とても喜んでいました。児童に、和食器を通じて日本人の豊かな感性を伝え、世界に羽ばたいてほしいです。

好意的に受け止められ、和食器で食べることに、対し、「日常」の値が低いのが印象的

食育を取り巻く環境と展開

(1) 今後の課題

出前授業を展開した中で、今後の課題としては、以下の点を強く意識し、引き続き模索していきたいと思っています。

- ・中学校で汎用性の高い食育
- ・理数系の教科を横断する食育
- ・食育リーダーなど、学校栄養職員・栄養教諭以外の先生による食育推進のサポート

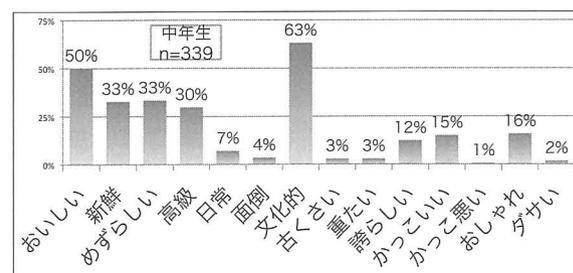
(2) 「生きた教材」への期待

和食文化の食育を展開した中で、和食の無形文化遺産登録があったからだけでなく、社会の変化の中で食育や給食に求められるものが大きく変化していると感じました。例えば、家庭での和食頻度や、使用する

図4 和食給食に関する感想



図5 和食器で食べることにする感想



る食器点数の減少、盛り合わせの多用、煮物やあんかけ料理等、別盛りする伝統的な和食の減少、「自分の箸・茶碗」の喪失など…。子どもたちに聞くと、いつの間にか見落としていた変化に、今さらながら驚かされます。

そして戦後から高度成長・バブル崩壊を経た日本にとって、今、給食がどのような「生きた教材」として新たな価値を持ち得るのか、深く考えさせられます。

例えば、農林水産省の有識者会議が行った「和食会議アンケート」調査の結果報告[※]において、「和食」を保護・継承していく上で保護・継承すべき要素20項目のうち以下が「重要な要素」として挙げられています(3・4番目に高く、共に80.7%)。

○器・盛り付け等しつらえ技術や目で楽しませる工夫

○「いただきます」「ごちそうさま」と自然の恵み豊かな食事に感謝する精神

この結果から、自然への感謝の気持ちを育む上では、食材を中心としながらも、それだけに留まらない、生きた教材への期待を感じました。このことは想定していましたが、その一方で大きな驚きであったのは、器・しつらえなどへの関心です。正直、食器メーカーに所属しながらも、ここまで高い重要性が求められることは意外であり、同時に生きた教材としての「うつわ」へ大きな責務と可能性を感じました。

(3) 道徳への広がり

和の食文化の食育では、より幅広い展開を模索する上で、教科・指導要領とのつながりが課題となります。そのような背景の中、平成26年の中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善等について(答申)』で注目した点を、以下に挙げます。

【道徳教育の指命】

- ・これらの指導の真の目的は、ルールやマナー等を単に身につけさせることではなく、そのことを通して道徳性を養うこと
- 【視点・内容に関して】
- ・自他の生命を尊重することの大切さを一層重視
- ・今後のグローバル化の中では、自国の伝統や文化への深い理解はもとより、多様性の尊重や価値観の異なる他者との共生なども重要

【道徳教育の指導方法をめぐる課題】

- ・例えば、道徳の時間において、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導
- ・発達の段階などを十分に踏まえず、児童生徒に望ましいと思われるわかりきったことを言わせたり、書かせたりする授業

【指導方法】

- ・多様で効果的な指導方法の積極的な導入



▲授業後に和食給食をいただくことで、食べる側の「おもてなし」の心も意識する(大谷口小学校)

- ・言語活動や多様な表現活動等を通じて、また、実際の経験や体験も生かしながら、児童生徒に考えさせる授業
- ・児童生徒の発達の段階を踏まえた指導方法を工夫

以上を意識すると、給食が担えるさまざまな場面が思い描かれます。実際、これまで実践した出前授業においても、生活指導の一環として取り入れられることが少なくありませんでした。

文字・画像や動画など画面の中の2次元情報・シミュレーション・決定された法則・ICTなど、通り抜ける情報があふれ、奔流する中で食育に関わると、日々、実物・実体験・実感が供される給食の価値が、より高まるのは言うまでもありません。

その中で、各先生方と相談を重ね、現時点での問題や不足点・課題をいただいて具体化することで、今回の実践は展開していききました。今後も和の食文化・うつわを通じ、「生きた教材」である給食に、今だからこそ求められ、再発見される価値感を、皆さま方と共に模索したいと思います。

※平成26年度日本の食魅力再発見・利用促進事業委託事業「和食会議アンケート」調査の結果報告

出前授業についてのお問い合わせ

三信化工(株) 東京支店

Tel.03-3539-3414